

伝統組織と技術革新  
中国自動車工業の周辺構造

浙江大学経済学院 教授 金 祥栄  
広島大学 名誉教授 竹内常善

Working Paper Series Vol. 2006-32  
2006 年 12 月

この Working Paper の内容は著者によるものであり、必ずしも当センターの見解を反映したものではない。なお、一部といえども無断で引用、再録されてはならない。

財団法人 **国際東アジア研究センター**  
ペンシルベニア大学協同研究施設

# 伝統組織と技術革新

## 中国自動車工業の周辺構造

浙江大学経済学院 教授

金 祥栄

広島大学 名誉教授

竹内常善

### 要旨

中国には金属加工業や機械部品生産を指して「五金産業」と呼ぶ。近代以前からの金、銀、銅、錫、鉄などの加工を意味したことから発した概念であるが、同時に「渡り職人」を含めた伝統的な職人集団の秩序が永く維持されてきた。浙江省永康はそうした地域の一つである。中国では技能や熟練は、商圈や営業特権ほど大きな意味を持たない。つまり、職人たちは政治的な権力機関や特権的流通業者の前では脆弱な存在でしかなかった。ただ、社会主義は流通業者の伝統的なネットワークと権益の体制を一掃した。その後自由な営業機会を獲得した中小生産者たちが、現代の自動車産業の展開の周辺で、どのように成長しようとしているのかについて、永康の五金産業に関する浙江大学の最近の調査をもとに整理した報告である。

## 1. はじめに

本稿は、筆者の要請を受けて、浙江大学経済学院の金祥榮教授とその研究室のメンバーが、2003年から2005年にかけて浙江省永康市で行った地域調査の報告書を下に、筆者が書き直したものである。オリジナルの報告書は『浙江省永康地区企業発展与産業集聚』とのタイトルが付されている。中国語で書かれた60頁ほどのものである。その何よりの特徴は、実態調査の難しい中国の地方企業の調査データを豊富に盛り込んでいる点にある。

この調査の眼目の一つは、この地域における伝統産業から近代的な機械工業部品を生み出すようになるまでの経緯を明らかにする点にある。さらに、この地域で中小企業が広範に叢生されてくる社会経済的な根拠を明らかにすることにも力点がおかれている。社会主義の統制的な機構の中から、どうして中小企業の形成が可能になったのか、あるいはインフォーマル・セクターに近いような零細経営の中から、近代的な機械工業製品の生産がどのように育まれてきたのかを理解する上で、この20年ほどの時期におけるこの地域の経験は瞠目に値するものだと考えている。

地域調査に直接関わったのは、前記の金教授（経済学院副院長）を中心に、同学院の講師である葉建亮と朱希偉の両名のほかに。大学院博士課程の李婧、王楷倫、汪偉、蔡一慶の4名が加わっている。調査準備段階での予備討論と、報告書に整理する段階での討議には、筆者のほかに、日本のアジア経済研究所の丁可研究員と、日本学術振興会特別研究員の兪仲乾が加わった。ほとんどの作業は2005年10月に終了しているが、その一端を日本語で紹介するのは今回が初めてである。なお、日本語訳にあたっては、LT Internationalの劉曉玉女史の協力を得ている。

なお、図表の表示には、最終的な検討が終了していないこともあって、中国語のまま残されている箇所もある。あくまで中間的な報告ということで、このままでの紹介となることをご寛恕願いたい。

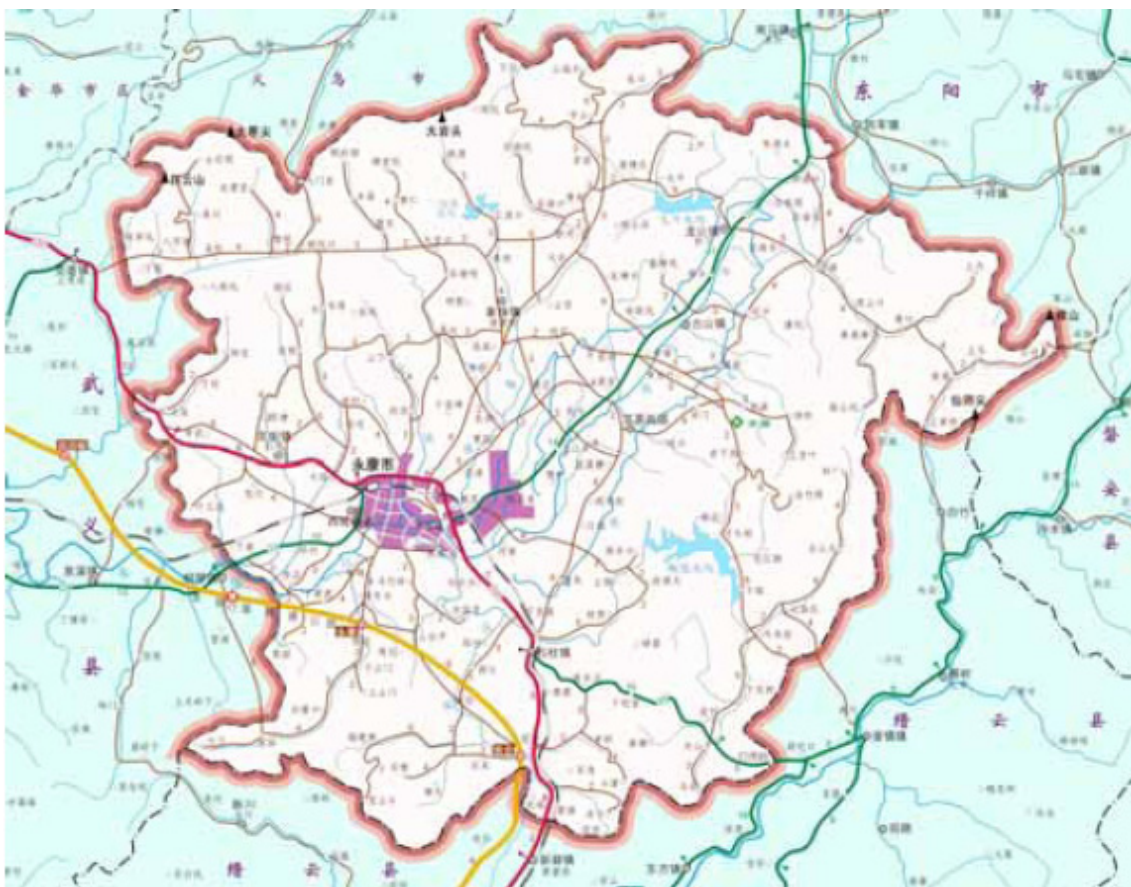
## 2. 永康五金機械專業化産業区の発展概況

### 2.1 現状と特徴

日本と違って、中国の行政区域は重層的になっている。市の中に別の市が置かれていたり、いくつもの市町村が存在していたりする。ここで紹介する永康市は、浙江省中部にある「県レベルの市」であり、北緯 $28^{\circ} 45' 38'' - 29^{\circ} 06' 25''$ と東経 $119^{\circ} 53' 19'' - 120^{\circ} 20' 45''$ の間に位置する。東北方面は東陽市と隣接し、東南方面は磐安県に隣接し、南方面は縉雲県と隣接し、西方面は武義県と隣接し、北方面は義烏市と隣接している。永康市は東から西へ長さが45キロメートル、南から北へ幅が38キロメートル、総面積が1046平方キロメートルである。日本のかつての行政区画である「郡」を幾つか束ねたような広

さだと思えばよい。この地域では、丘陵、平原と低い山がそれぞれ44.30%、38.70%と17.00%を占めている。要するに農業には適していない。永康は杭金衢を通過して、金麗温高速道路を利用して杭州、金科、温州、衢州等の中心都市と繋がる。また、金温鉄路と永東一号線、永東二号線から市内を通過することができるので、交通は便利である（図1）。

図1. 永康市区位置図



中国では金属加工業を「五金産業」と呼ぶ。伝統的には貴金属加工を含むが、伝統的な金属製品生産を指していた。改革開放以来、永康はそうした五金産業から出発しながら、近代的な金属加工業へと迅速に展開しつつある。工業総生産高は1978年の6,917万元から2003年の380億元に増え、550倍となった。年平均の成長率にして28.7%になる。これは全体の地区の経済発展を促進した。そのため、本地区の総生産高は9,643万元から2003年の110.63億元までに増え、115倍近くとなり、年平均にして20.90%増えた。1人当りのGDPは1978年の221元から20,601元が増え、93倍となった。年平均にして19.9%の成長になる（表1）。

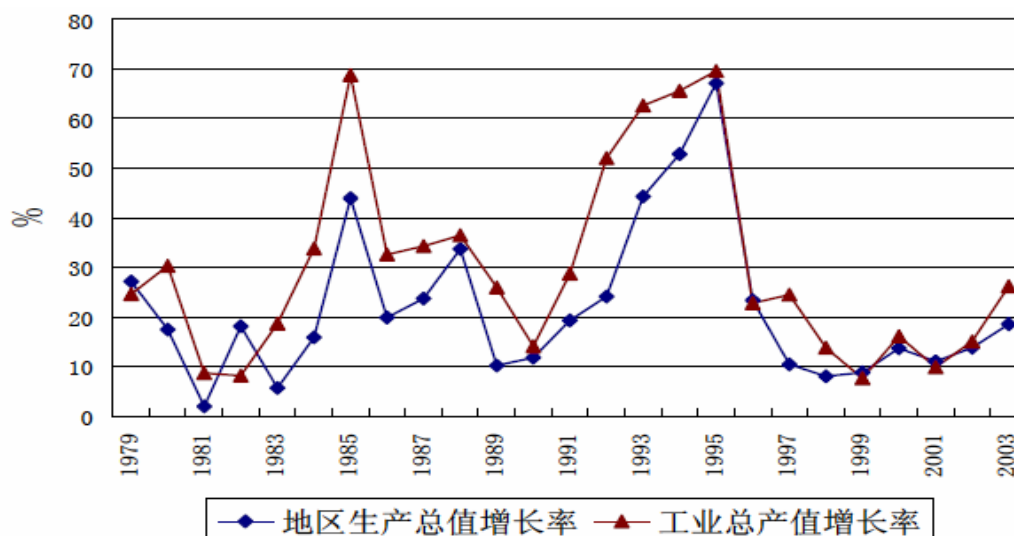
表 1. 改革開放以来永康市経済発展の総体的情況

年度	地区総生産高	1人当りGDP	工業総生産高
1978	0.9643	221	0.6917
1979	1.2256	278	0.8617
1980	1.4395	323	1.1224
1981	1.4677	325	1.2196
1982	1.733	378	1.3185
1983	1.8304	394	1.5644
1984	2.1212	452	2.0932
1985	3.0531	645	3.5329
1986	3.6591	767	4.6827
1987	4.5265	939	6.2887
1988	6.0523	1238	8.5793
1989	6.6693	1345	10.8052
1990	7.4527	1481	12.3256
1991	8.8885	1746	15.8616
1992	11.0299	2153	24.1117
1993	15.9133	3102	39.2048
1994	24.3256	4731	64.9283
1995	40.6611	7863	110.132
1996	50.1559	9642	135.1736
1997	55.3812	10603	168.1879
1998	59.82	11400	191.3699
1999	65.06	12343	205.86
2000	73.937	13969	238.99
2001	82.061	15419	262.39
2002	93.3571	17458	301.8
2003	110.6316	20601	380.8

資料出所：毎年永康統計年鑑。

この20年ほどの発展の過程を見ると、永康地域の工業生産と地域経済は著しい周期性が見られる。1985年前後に、永康の工業生産には第1回目の急激な発展が見られた。最高で工業の年成長率が70%近くに達していた。地域の総生産高でも、年間成長率が最高で45%近くになっていた。第2回目の急拡大期は1995年前後に現れ、工業生産と地域のGDPの成長率は再び最高70%近くに達している（図2）。

図 2. 永康工業生産総額と地域総生産高情況



資料出所：毎年の永康統計年鑑。

浙江大学经济学院では、特定地域における特定産業で、このように急激な成長と集積が見られる場合、それを「專業化産業区」と呼んでいる。浙江省の各地には、そのような專業化産業区がほとんど自生的に形成されてきた。その歴史的社会的根拠を探るのが、本稿の課題であるが、「永康五金機械專業化産業区」とは、永康を中心とする金属機械企業が周辺地域へ拡大し、武義や縉雲などの郷鎮で形成された新たな金属機械生産企業群の集中区を含んでいる。そうした経営の特徴は家族経営を軸とした中小工場であり、生産高で 100 万元以下の金属加工型企业（個人）は主に村レベルの工業区に集中している。生産高が 100 万元を超える金属加工企業は、主に鎮レベルの工業区に集中している。生産高で 1,000 万元を超えるような金属加工企業は主に「五金科学開發区」に集中している。規模の大きい生産企業は五金科学開發区に集中しているため、省レベルの五金科学開發区としては、開發区と周辺の数十に及ぶ鎮レベルの工業区ならびにさらに無数の村レベルの工業区との「ネットワーク」といった地域構造として理解されている。

永康五金機械專業化産業区で製造された金属機械製品の品種は、永康市統計局と經濟貿易局の分類により (1) 電動工具, (2) 衡機, (3) 有色金属, (4) 家庭製品及び台所用品, (5) ステンレス製品, (6) 安全扉, (7) 電動台車, (8) 車とバイクの備品 (9) その他の五金など, 9 大種類に分類される 1 万余りの品種から<sup>1</sup> になっている。そのうち, 30 種類以上の製品については製品の国内市場占有率が高く, 全国の輸出総量の 50%以上を占めている。

<sup>1</sup> 胡香青の「我市八大五金行業の規模概況」《永康統計》(内部刊行物), 第十三期, 2004 年 6 月 24 日。

中国では企業を行政上の単位として看做す独自の集計が行われているが、全国の「基本単位」に対する調査データによると、2001 年末の永康五金機械專業化産業区は五金機械工業単位数 8,331 個を保有し、全市工業単位総数（10,948 個）の 76.10%を占めている。この 8,831 個の五金機械工業単位のうち、法人単位が 1,936 個であり、全市工業法人単位数（2,464 個）の 78.57%となり、年間の営業収入としては 106.20 億元を実現し、全市の工業企業の年間営業収入（123.70 億元）の 85.86%を占めている。「個体工業工場」（個人経営の工業工場）は 6,395 軒を数え、全市の個人工業工場の総数（8,484 社）に対し 75.38%を占めている。1～9 月期には、営業収入 47.80 億元を実現し、同期の全市個体工業者の営業収入（62.30 億元）の 76.65%を占めている<sup>2</sup>。2002 年、永康五金機械專業化産業区は既に電動工具、電動かみそり、安全扉、電動台車、ガスコンロ、衡機等の五金機械製品の全国で最大の製造基地の一つとなっている。

## 2.2 発展の経過

### (1) 第一段階：新中国の成立以前

この地域の金属加工業の歴史は圧倒的に古い時代にまで遡ることができる。南朝の陳時代に活躍した虞荔が書いた中国の古代鼎器の権威的著作である《鼎录》にも、そのことが記載されている。そこには「金華山（永康石城山）黄帝作一鼎，高一丈三尺，大如十石翁，象龍騰雲，百神率螭獸滿其中。文曰：真金作鼎，百神率服。复篆書，三足」<sup>3</sup>とある。当地の歴史学者たちによると、永康では“黄帝鑄鼎”を製造した時期から金属冶煉の累積的發展が始まったと一般に認識されている。そして、その技術の継承の過程が、そのまま永康五金機械産業發展の歴史とされている。春秋戦国時代、永康は既に青銅器を製作していた。漢代の永康では既に銅弩機、銅劍、鉄の刃物などの武器と神獸鏡、銅製スプーン、銅碗などの生活用品を製造している。五代になると、永康は錫の職人が現れた。唐代には、方岩では鍛冶職人を募集して包丁、鋏と鋤を加工し、専門の店舗において販売したことが確認されている。元代で、永康は鉄錠を貢ぎ物としていた。明末には、鄭成功の軍隊に永康鉄の職人として王氏が作った刃物、斧、劍、ハンマーなどの兵器が利用されていた。清代には、永康の鉄職人たちは既にシームレスの銃身を製造し、火銃に用いていたとされている。民国時期には、永康の鍛冶職人は主に農業具、手仕事用工具と生活用具を作っていた。時代が下ってきて、素朴な製品への逆行現象が見られるが、そのことについての解釈は幾つか可能である。そのことよりも、この地域の製品が全国的に流通していたことのほうが重要である。

<sup>2</sup> 胡香青の「永康の五金支柱産業を創建—五金機械工業産業の結構分析（永康市第二回基本単位普查系列分析材料の二）」、《永康統計》（内部刊行物、第四十期、2002 年 12 月 9 日）。

<sup>3</sup> 《永康石城山黄帝文化》編集委員会、《永康石城山黄帝文化》（内部発行）、1998 年 9 月、32～33 頁。

ところで、早期の永康五金職人の経営方式は二種類に分けられていた。一つは「固定経営」と呼ばれる居職人の経営で、いま一つは「流動経営」と呼ばれる遍歴職人の世界だった。固定経営には、自家経営のほか、加工場と店舗経営を擁するものとの二種類に分けられている。自家経営は自宅での経営を中心としたもので、職人は自宅に定住して、零細な農業の傍らで、鍛冶の仕事をしたりしていた。彼らは農業の閑な時期に顧客相手の加工を引き受けたりしている。一部では見込み生産がなされ、製品の販売は外部へ託送販売をしたり（西欧の中世にみられたコンサインメントに近い）、顧客が定期的に購入しに來たりしていた。

工場と店舗を経営の場合、地元で工場と店舗を設置し経営する場合だけでなく、遠隔の地に経営の処点を設置して経営するものもあった。民国 36（1947）年 9 月の調査により、永康県内の職場には「鉄匠業」が 1,059 軒、手工業者は 5,298 人となっている。また、銅業は 850 軒、工匠 1,955 人、錫業については 822 軒で、工匠は 1,441 人、銀製品については 31 軒で、工匠は 46 人であった<sup>4</sup>。

流動経営は地元の域内における流動と、外地への流動の 2 種類に分けられている。地元流動の場合、自宅を中心に生活しているが、作業中は顧客のところで食事をしながら作業を行う。隣家、同村、隣村へホームサービスを提供する。このようなサービスは、修理職人や小五金の職人の場合に最も一般的に見られたという。外出流動の場合、一部の職人は道具箱をてんびん棒で運んで（片方に道具、片方に布団）各地を遍歴しながら営業を続け、注文を受ければ生活用具を作ったり、加工したり、修理したりしていた。彼らは南から北へ、中華世界の至る所を住家とし、正月から夏収穫、夏栽培の時しか故郷に帰らない。そして、八月に再び家を出て、十二月に家に帰り年を過ごす。永康から外出した遍歴の五金職人の足跡は全国の至る所にある。そのため、“銅匠、鉄匠は四方に走り、全国の至るところにある”と言い方がある。永康はこうして“百工の郷”とまで言われてきた。解放初期まで、永康の金属加工業は主に家庭経営の形で、古くからの伝統的経営方式を保持していた。永康全県下における金属加工業の従事者は、民国 18（1929）年で 4,827 人、25（1936）年で 5,931 人、37（1948）年で 9,295 人であった<sup>5</sup>。1949 年までに、永康における“小五金”工業の雛形はほぼ形成され、特に鉄業の発展は一定の規模と水準に到達していた（表 2）。

<sup>4</sup> 永康县志编纂委员会，《永康县志》，浙江人民出版社，1991 年 3 月，第 149～150 頁。

<sup>5</sup> 永康县志编纂委员会，《永康县志》，浙江人民出版社，1991 年 3 月，第 171 頁。



表 2. 1949 年永康“小五金”工業概況

産業別	年間総生産高(石米)	主要製品 全年数量	主要生産総生産高		特徴
			人民元(元)	折石米	
銅業	496.8 石 74520 斤	1,440 枚	3,808,800	220.8 石 33120 斤	一年で6ヶ月の仕事日より計算, 毎月に20個の銅釜, 毎個で米23斤が買える。
鉄業	4939 石 740880 斤	22,680 個	31,298,400	1814.4 石	一年で4ヶ月の仕事日より計算, 毎月に7個の銅釜, 毎個で米12斤が買える。
錫業	264 石	600セット ト灯台	1,518,000	88 石 13200 斤	一年で6ヶ月の仕事日より計算, 毎月に15個の銅釜, 毎個で米14斤が買える。

資料出所：徐赤金主編，《永康县供销社志》，北京：中国青年出版社，1990年10月，第60，63頁。

(2) 第二段階：1950年代初から1980年代末まで

全国的なことであるが、1951年になると、中国では中央の関連指示に従い、家族経営を中心とした個体手工業の合作化が強力に推進されるようになる。そのことは永康でも同様に進められていた。この地域の代表的な経営者であった胡宝倉、王耀忠、钱炳章等は永康の代表的手工業組織と呼ばれるようになる城関鉄業グループを設置している。それは、城関鎮の五個の個体鉄工場を合併したもので、5基の炉があり、組員は13人いた（そのうち1名は会計として雇用された者であった）。経営の基礎的な原則と具体的な方法については、次のようなことが確認されている。

- (1) 自発的で、かつ相互利益と協力関係を推進する。
- (2) 工具を組のものとして加入し、基金としての株を設定する。丁稚の株は毎月の給料から控除される。
- (3) 原材料は責任をもって引き受ける、例えば、十数枚の刃ものを作るために毛鉄6斤、木炭一俵を分配する。原材料の節約を奨励し、足りなかったら賠償する。
- (4) 報酬については出来高給を原則とし、労働量の水準によって支給額を決める<sup>6</sup>。

1954年、手工業に関する全面調査が行われ、永康全県の手工業には銅、鉄、木、竹、桶、錫など30個あまりの工業が確認された。そのうち、家庭用農具用金属製品生産を担う「小五金」の職人は11,980人に達していた<sup>7</sup>。1958年、「浙江省工業発展綱要」（草案）第50条に定められた「全党で工業を推進し、全民で工業を推進し、郷鎮で工業を推進する」に従

<sup>6</sup> 梅子謙等，“五十年代永康の手工業”，載永康市政协文史資料第十三輯《五十年代的永康》（内部発行），第243～244頁。

<sup>7</sup> 林建新，“忆五十年代我县统计工作中的二，三事”，載永康市政协文史資料第十三輯《五十年代的永康》（内部発行），第281頁。

い、多くの一定の資金を持っている手工業合作社は「集体合作」と呼ばれる社内主義的経営体の工場または地方の国営工場に転換した。永康農具機械廠はその典型的な経営事例である。しかしながら、1950年代末期になっても、永康ではまだまだ現代的な金属機械を製造する企業はなかった。

50年代末から60年代初期にかけて、当時の行政単位である金華専区では農業用機械の生産部門を浙江省から引き受け、そのための場所を金華蔣堂に決めた。その後まもなく、永康に名義変更し、1961年8月1日に正式に稼動した。その時期の当廠の名称は永康機引農具廠で、後に浙江永康トラクター廠に変更され、現在の名称は浙江四方集团公司になっている。浙江永康トラクター廠は、文化大革命の初期に、浙江省の関連部門はかつて麗水地区の麗水動力機廠、新安江畔の金華専区の農機廠と寧波市の寧波動力機廠から一部の技術者と機械設備を浙江永康トラクター廠に移した。その中金華専区農機廠は1961年に永康に引っ越した<sup>8</sup>。1968年、永康トラクター廠は195型ディーゼル・エンジンと工農-12型トラクターの研究開発に成功し、1970年からは大量製造が始められた。1990年末まで、浙江永康トラクター廠は累計で手押し式（手扶）の同型トラクター270,937台とディーゼル・エンジン350,187台を製造した。全省200社の大規模製造工業拠点のうちの第67位になっていた。

この工場は永康における機械金属加工業が、手工業型の工場段階から現代的機械式製造段階に移行する大きな契機となった。現地では、永康五金機械産業はこの時期に「原子式」の分散した組織から「中衛型」の合作システム段階に発展したと評価している。その内容はおおよそ次のようなものである。

第一に、永康トラクター廠は、手扶トラクターの「国家二級企業」として、伝統的な親方・徒弟関係を克服して、近代的な機械生産システムに応じる技術とそのための人材養成の拠点機関となり、非伝統的「零敲碎打」の工程技術が形成された。

第二に、永康トラクター廠は大量の経営管理人材の育成に成功し、改革開放後の永康機械金属産業企業の発展を促進する要件を形成したことが評価されている。とりわけ、最近の国有企業では内部要因の欠如から、効率が低下し、組織の十分な活用ができなかったことから、永康トラクター廠における販売及び経営管理者は、多くの経験と知識を蓄積した後、供給不足の現状と売買ルートが存在を利用して、無数の個人企業を作り出すことになった。

第三に、永康トラクター廠は五金機械産業における初期的資本形成にとっての重要な鍵となった。永康トラクター廠は、それ自体が多くの部品需要を作り出すことで、機械金属加工業の専門化地域の早期形成要因を促進していったのである。多くの企業は現在では「集団」の名義と組織を擁している。それでも当初は、集体で有限公司を形成し、資本規模も

<sup>8</sup> 屠成林，“永康拖拉机厂筹建前后”，载永康市政协文史资料第十八辑《六十年代的永康》（内部发行），第113，115頁。

小さかった。当初は企業の組織者が永康トラクターとの関係を維持して備品製造企業になり、企業の規模を徐々に拡大し、その後、永康トラクター廠から離脱して、市場競争力を有する機械・金属加工業の企業になっていったのである。

### 2.3 第三段階：1990年代から現在まで

20世紀の80年末から90年代の初めにかけて、永康五金機械專業化産業区では相次いで各種衡器、ガスコンロ、銅なべ、電気、電動工具、アルミ製建築材料、身体トレーニング用器材、魔法瓶、安全扉、スケート・ボード等の製品が製造され市場に投入されるようになる。これらの製品供給の特徴は、いずれの部門についても、生産企業が1,2年のうちに夥しい企業数が登場したことにある。急激な成長と、すぐに生じてくる生産過剰と製品価格の暴落の試練に耐えかねて、多くの企業は滞貨に悩み、そうした新興部門から撤退した。ただ数社は、激しい競争に耐え、ある程度の規模レベルに生存してきた。このような状況を経験した部門のうち、魔法瓶生産とスケート・ボードを典型事例として紹介しておこう。

魔法瓶生産の事例：1995年4月、永康におけるステンレス製魔法瓶の生産メーカーは数社に限られて、少量生産となっていた。ところが、5,6月からポットの生産メーカー数は次第に増え始めた。9月以後、販売ルートの拡大が順調だったことと、製造コストと市場販売価格の差額が大きかったこともあって、製品の供給は需要に追いつかない状況が続いた。こうして、五金製品における大量生産型の小企業は次から次へと魔法瓶の生産に転換した。1995年11月から12月にかけて、その数はピーク時期に達し、永康において魔法瓶とその備品を生産する企業は生1,300社になり、魔法瓶の最終生産ラインは2,000余りに増え、一日当たり10万個以上が製造され、年間に1,400万個以上が市場に投入される事態となった。1995年12月以後、製品の過剰生産から市況は弱含みとなった。こうして、永康における魔法瓶の生産量は急激に低落することになり、2ヶ月後(1996年2月)における永康での月間生産高はピーク時期11の1/8ぐらいになっていた。

スケート・ボードの事例：魔法瓶ブームの後、2000年になると永康ではスケート・ボード生産をめぐる熱気が強まっている。永江公司総経理の陸永江はアメリカの街角でこの製品を見かけ、400ドルで2個のサンプルを買って帰り、試作してすぐに成功したと言われている。その後、多くの注文が舞い込むようになり、もっとも多い日には1日の供給量が2万台を超えたい。供給量が多くて厚い利益幅があったことから、その他の企業も一斉にその製品の供給を開始した。そのため、企業数は2000年5月の4,5社から9,10月には400~500社になり、一日あたりの生産量は1,000~2,000台から10万台以上に増えたと言われている。当然のことながら、しばらくして、この製品の市場は飽和状態になってしまった。限られた層への嗜好品であるため、その熱は急速に冷え込んだ。ただ、スケート・ボードへの生産熱が下がりつつあった時、電動用モーターを製造する浙江星月公司がスケート・ボードを改造し、電池を入れて、ゴム車輪に変えて、電動式スケート・ボードの生産に乗り出した。結果的には、永康でスケート・ボードを製造する企業は数社しか

残らなかったものの，“星月”の新製品はよく売れるようになり，2001年における電動式スケート・ボードの輸出額は3,000万元以上に達し，2002年1月から9月にかけての星月公司の同製品の外国販売額は1億元以上で，前年の同期と比べて50%以上になっていた。

このように，永康における機械・金属加工業の産業的発展には大きな市場変動が付きまどっている。大量のメーカーが特定部門へ突発的に参入し，その結果，製品の過剰生産によって価格の崩壊と企業の撤退が見られることになる。最終的には，ある程度の規模とレベルに達した数社の有名大企業しか残れない。こうして，魔法瓶生産の波の後には，飛集団，南龍集団等が，またスケート・ボード生産の大波瀾の後には，永江公司，星月集団が，そして安全扉の波浪に続いて王力集団，群昇集団等の成長が見られた。表3には，永康における「五金機械專業化」によって現れた魔法瓶，安全扉やスケート・ボードの波に関する基本状況が反映されている。

表3. 永康五金機械專業化産業区の3回の波動情況

年	製品名称	製品生産量 (生産高)		製品開発			製品価格		
		最高生産量	年生産高	生産企業	開発方法	開発時間	初期価格	後期価格	最低価格
1995	保温杯	1日に10個以上製造	20億元近い	万事达有限公司	解体して模造する	6ヶ月	1994年～1995年4月に288元以上/個	1995年10月に10数元/個	8元/個
1998	防盜門	1日に2,000枚製造	10億元	康达公司	解体して模造する	7ヶ月	1996年～1997年1,000～1,200元/枚	1998年底550～650元/扇	370元/枚
2000	滑板车	1日に10万台製造	20億元以上	永江公司	解体して模型する	4ヶ月	2000年4～5月に300元以上/台	2000年11月に100元以上/台	60元/台

資料出所：胡德伟，「永康浪潮經濟初探」，《浙江社会科学》2002年第1期，第187頁。

### 3. 永康五金機械專業化産業区の分業業構造について

#### 3.1 早期分工構造

##### (1) 永康トラクターを中心とした協力システムの形成

永康トラクター廠（元は永康機引農具廠）は1961年に成立しているが，その当初は，主

に華東地区にトラクターの備品を供給していた。60年代中期以降になって、浙江省農業機械局は工業企業の一部工程を専門化の方向へと誘導する政策に転じ、ピストンやシリンダー等の備品生産を主機廠から分離する。この背景下で、永康トラクター廠にはエンジンのピストンとシリンダーと言う重要備品が分離委託され、永康ピストン廠と永康シリンダー廠が成立した。「1966年、永拖はピストンと言う製品をわが社に拡大した後、農業機械用ピストンの生産が始まった。ピストン生産がある規模になった後、七十年代初期、県農機修造廠では‘永康ピストン廠’を成立させた。その後、‘小钢磨’を芝英鎮に拡大し、シリンダー製品を石柱鎮に拡大し、これが永康シリンダー廠となった<sup>9</sup>。

1970年当時、永康トラクター廠では手扶（手押し式）トラクターを大量に製造し、大部分の備品は当廠で生産した。但し、一部のトラクター廠の備品については（定点件和标准件）、全国の九省二市から集めていた。その分布範囲が広く、距離が遠いので、時々納品が遅れていた。問題があった場合、すぐには解決できず、正常な生産に支障を来していた。そのため、永康トラクター廠は相前後して方岩、黄店（堰头）、溪岸、长城などの比較的條件が整った郷鎮において、公社、大隊の協力をとりつけ、小工場を設立し、一部のトラクター部品の製造任務を担当させた。永康トラクター廠は、こうした「社隊工業」を扶助するために、幾つかの決定的な方策を講じた。その一つは、生産設備を提供したことである。永康トラクター廠は更新対象にされた旧型設備と中古品や古いものを改造した上で、社隊企業への供給を図った。また、製品の技術的要求に従い、専用の小設備を作り、砂型や鋳物生産に用いる三段炉、コンベア、熱処理用の装置、コンプレッサー、簡単な移動装置、刃物、工具なども供給している。さらに生産技術を提供し、指導することも行った。製品を発注する前、社隊企業から人員を永康トラクター廠に派遣させて技術指導を行い、基本的な操作と工程基準を指導した。また、製品を発注した後、永康トラクター廠では常に技術者を社隊企業に駐在させて、検査及び指導に当たっている。「例えば、黄店公社農機廠は鋼材ブロックの製造とベアリング用鋼材の生産に困難があり、製造科は熟練の技術者を現場へ派遣し指導し、公社における技術人材を育成し、製品の品質を向上させた。方岩公社農機廠では熱処理の操作に経験が不足しており、公社では人員をトラクター廠へ派遣し見学と学習を行わせ、実際の操作について実習を経験させた後、製品の品質、数量をアップさせた」<sup>10</sup>との記録もある。このように、永康トラクター廠の協力下で、永康では大量の部品を製造する社隊企業を發展させ、永康トラクター廠を中心した協力関係のシステムが形成されていった。また、永康の部品製造には地元の圧倒的な支持が得られ、遠隔地からの購入率が下がるとともに、販売コストもまた降下した。「目前（1976年）、全県下では14

<sup>9</sup> 杜平烈，“七十年代永康工业见闻”，载永康市政协文史资料第二十辑《七十年代的永康》（内部发行），第101～102頁。

<sup>10</sup> “向着光明灿烂的共同目标前进—永康拖拉机厂武装社队（乡镇）工业的调研报告”，载永康市政协文史资料第二十辑《七十年代的永康》（内部发行），第96頁。

社の公社農業廠が毎年トラクター廠（永康トラクター廠）に 133 個品種の備品を製造している、計 867,600 以上となり、トラクター廠の自社製の備品の 40% ぐらいになっている」<sup>11</sup>。

永康トラクター廠を中心とした協力関係の成立によって、永康の五金機械專業化産業区では外地に頼っていた中間製品を地元化させ、中間製品の輸送、販売コストを下げる事ができた。長い歴史と伝統によって、機械・金属加工業に従事する潜在的労働者の数は多く、永康の其の他の産業から「五金機械」の製造に転換することが進んだ。こうして、「1978 年までに、全県下で社隊が成立させた集団企業は 1,000 社以上になった。この時期の社隊企業は基本的に国営企業であり、第二輕工業企業は備品を加工して、品種はまだ少ないが、製造と金属加工品を中心に市場へ出して販売した、例えば、衡器等。この期は社隊企業が十年の模索から、農村で農民による企業を作り出す方策を創出し、経験に富んだ管理人材や技術者を育成した。そのことが、以後の農村企業の発展にとっての基礎を作り出した。」<sup>12</sup>との報告が出されるまでになる。

## (2) 伝統的「五金手工業」を基礎とした「五金專業村」の形成

既に紹介したように、永康五金機械專業化産業区の発展歴史は長く、民間の五金手工業は昔から盛んだった。伝統的な金属加工業は一般的に家族や同族集団を基本とする単位で形成され、親子や夫妻あるいは師弟の関係による分業関係を形成していた。そのため、工業化の初期段階においては家内工業的なものを中心となっていた。家族的な協力関係と包括的な責任体制の遂行は、やがて農業生産の生産率を高め、そのことで多くの農民が土地への束縛から解放される条件を醸成すると同時に、農村からの余剰労働力を大量に工業生産に振り向ける可能性を培った。こうして 1980 年代以後、永康地域の農村では 80 種以上の製品を作る專業村が生まれた。これらの專業村のうちの大部の農村では、同一種類の商品を製造し、そのうち、規模がやや大きいものは手工業による金属加工品の製造を行うようになった。例えば、古山镇孙宅村の場合は、全村の 106 世帯のうち、99 世帯が刃物や鋸の加工に従事するようになった。1984 年の収入は 16.8 万元に達し、一人当たりの平均収入では 416 元になっていた。胡庫郷の埭塘村では、90%の農戸が秤量器具の加工に従事し、1984 年の生産額（中国では生産額で推計されている）は 66 万元となり、農家副業の総生産額の 90.3%を占めていた。一人当たりの平均収入 515 元だと報告されている。古山镇黄塘村では 112 世帯が 1984 年にアルミ製の物指や秤量器具を製造していて、そのうちの 60 世帯余りが“万元世帯”となっていた<sup>13</sup>。表 4 では、1984 年頃の永康五金機械專業化産業区における、五金產品加工專業村の区域分布と產品生産情况进行を紹介している。

<sup>11</sup> “向着光明灿烂的共同目标前进—永康拖拉机厂武装社队（乡镇）工业的调研报告”，载永康市政协文史资料第二十辑《七十年代的永康》（内部发行），第 98~99 頁。

<sup>12</sup> 陈歧彪，“对近期永康乡镇企业发展的回顾”，载永康市政协文史委员会，《埭塘之路—永康乡镇企业发展的足迹和展望》（内部发行），1996 年 1 月，第 17 頁。

<sup>13</sup> 永康县志编纂委员会，《永康县志》，浙江人民出版社，1991 年 3 月，第 181~182 頁。

表 4. 1984 年前後永康五金製品加工專業村の情况

乡镇	村	产品	乡镇	村	产品
俞溪头乡	峰箬	小五金	胡库乡	两头门	铜秤钮
芝英镇	五村	铁皮箱, 冰模		埭塘	磅秤配件
古山镇	孙宅	锉刀, 铁锯		前园	铁秤配件
	黄塘坑	铝勺, 铝秤盘		寺下胡	冰模
	前黄	铝锭	金江龙	铜铁秤钮	
方岩乡	西炉	铝锭	油川乡	后社	冰模
	象鸣畈	花边刀	金川乡	前坑	小五金
西溪乡	文楼	铁丝捞篱	清溪乡	松明坑	铝锭
	玉川	锉刀, 纺织配件		山西孔	衡器配件
	石江	纺织配件	长田乡	邵宅	铜火囱
	上堂头	纺织配件	岩后乡	井头	粉干铁

資料出所：永康县志編纂委員会，《永康县志》，浙江人民出版社，1991年3月，第182～183頁。

### 3.2 分業関係の展開

1980年代末から90年代初期にかけて、永康五金機械專業化産業区において衡器、コンロ備品、銅製火鍋、電気食器、電動工具、ドア金具、トレーニング器具、魔法瓶、安全扉、スケート・ボード等の製品が相次いで製造されることになった。この時期になると、製造は規模と企業のレベルをアップした数社を中心に行われるようになった。これらの企業は「規模企業」とも呼ばれるが、日本の例で言うなら新興の中堅企業だと思えばよい。ただ、その成長と拡大のテンポは日本の場合とは比較にならないほど早い。その一端は前節で紹介した。こうした「規模企業」は地域における中心的企業として大量の中小加工企業を組織し、それぞれの担うべき專業化を促進させることになった。また一方では、永康拖拉機廠を中心とした分業と協業の関係を高度化させていった。さらには、「五金專業村」との地域的分業関係を構築するに至っている。こうして、産業のチェーンとなる分業関係が独自に形成されるが、浙江大学ではこうした状況を「中衛型」の「縦向分工協力システム」と呼んでいる。「永康市第二次基本単位審査資料」から見ると、永康五金機械專業化産業区においては金属製品業と一般機械製造業が二つの主要業界を構成していて、法人数（「法人単位数」）で見ると、「五金機械工業法人単位数」の64.31%を占めている。この二つの業界は個体工業戸数の上では、「五金機械個体工業戸数」の71.15%を占めている。この二つの業界では、主に手工工具、鋼製桶等金属容器類、安全扉、ステンレス製品、鋏等日用五金製品、ディーゼル・エンジンおよびその備品、鍛圧設備、電動工具及びその備品、バルブ類、チェーン類、各種ギヤ等を製造し、販売している。金属製品業の法人単位数と個体工業戸数の比は1:4.08となっていて、普通機械製造業の法人単位数と個体工業戸数の比は1:3.19となっている（表5を参照のこと）。大量の個体工業戸（個人経営）の登場は永康

五金機械專業化産業区の形成と規模企業を中核としながら、この地域の專業化と分業関係の形成にとっての加速要因を創出してきた。

表 5. 2001 年永康市第二次基本単位審査情況

	單位數		従業員				売り上げ			
	法人 單位 (個)	個体 工業戶 (個)	法人單位		個体工業戶		法人單位		個体工業戶	
			總數 (人)	平均數 (人)	總數 (人)	平均數 (人)	總數 (億元)	平均數 (萬元)	總數 (億元)	平均數 (萬元)
工業合計	2464	8484	87307	35.43	35527	4.19	123.69	502	62.30	73.43
--五金機械工業	1936	6395	73405	37.92	26803	4.19	106.20	549	47.80	74.75
----金屬製品業	653	2664	22918	35.10	11087	4.16	26.15	400	17.59	66.03
----普通機械製造業	592	1886	22880	38.65	9186	4.87	24.72	418	12.77	67.71

資料出所：胡香青，“构建永康五金的支柱产业—五金机械工业产业结构分析（永康市第二次基本単位審査系列分析材料之二）”，《永康統計》（内部刊物），第四十期，2002 年 12 月 9 日。

\*注：个体工業戶營業收入為 1~9 月份數值，按照戶均年營業收入 98 萬元測算（根據普查登記和重點分析進行調整），2001 年个体工業戶全年營業收入測算值為 83.14 億元。

永康五金機械專業化産業区中の金屬製品業はまたさらに、日用金屬製品、建築用金屬製品と工具製造業などの 3 種類に分類されている。それらはさらに小分類されているが、建築用金屬製品のうち安全扉（日本で言うなら通常のアルミ製のドアであるが、歴史的な経緯もあって、中国では盜難防止扉と呼称されている。鍵の部分が物理的には頑丈になっている）の製造部門を事例として見ておこなうなら、永康五金機械專業化産業区で安全扉を製造する企業としては 50 社以上ある。そのうち、王力、步陽、群生、新都等の企業は知名度がやや高い。また、安全扉の備品を製造する企業となると、その企業数は数 100 社となり、そのうち、忠恒、佳卫、石牛、华达、航鷹、嘉恒等のオート・ロックの製造企業は一定の知名度を有する。永康佳衛錠廠が生産した盜難防止のデジタル制御式防盜錠、永康忠恒錠廠の生産した插芯自動防盜錠は国内初の製品となっている<sup>14</sup>。スケート・ボードの流行期に永江公司が現れたことは既に見たが、この分野では星月集團等数社の中心企業と並んで、部品メーカーが 50 社余り育っている。電動工具の組み立てメーカーは 65 社で、部品生産企業は 200 社余りとなっている。秤量機器の完成品生産企業は 36 社で、部品生産企業は

<sup>14</sup> 永康市人民政府，中国联合工程公司，“中国五金產品制造中心産業规划”（内部資料），2003 年 10 月，第 14 頁。



42 社となっている<sup>15</sup>。

表 6. 永康市八大五金機械工業規模企業の集中度（2004 年 1～3 月）

	企業数 (家)	工業总产值		
		全部(万元)	前十家企业(万元)	C10 (%)
規模上企业总计	572	456,115		
--五金机械工业	556	415,522	273,223	65.75
----八大行业	362	354,735	246,494	69.49
-----1.电动工具行业	76	54,617	30,862	56.51
-----2.衡器行业	10	3,522	3,522	100.00
-----3.有色金属行业	35	109,546	78,012	71.21
-----4.小家电及厨房用具行业	32	13,033	10,558	81.01
-----5.不锈钢制品行业	41	27,595	20,644	74.81
-----6.防盗门行业	31	25,979	19,354	74.50
-----7.电动车行业	58	47,355	38,376	81.04
-----8.汽摩配行业	79	73,088	45,166	61.80

資料出所：胡香青，“我市八大五金行业規模概況”，《永康統計》（内部刊物），第十三期，2004 年 6 月 24 日。

こうして永康五金機械專業化産業区では、部品メーカーの專業化を軸にした分業構造の促進が図られてきた。中心的企業は大量の部品を專業化した中小企業に委託することでコストの一層の引下げを推進している。中心的企業は專業化された部品を製造する企業と取引の双方の場で情報交換を図ることができ、取引過程における違約コストと輸送コストの引下げに成功している。このような価格決定メカニズムが働くことで、中心的企業の資本形成と効率的運用がさらに加速され、そのことは彼らの地域における産業集中度をより迅速に向上させるものとなっている。表 6 は、代表的な 8 部門（行業）における「規模企業」のうちで、上位 10 社の「総産値」シェアを見たものである。ここから分かるように、歴史的伝統のある衡器業界ではトップ 10 社で既に 100.00%を占めている。次いで、電動式スケート・ボードスケート部門では 81.04%を占めている。八大産業のうち、集中度がもっとも低いのは電動工具業界である。それでも、トップ 10 社の規模以上企業に占める比率は 56.51%となっている。

<sup>15</sup> 林承亮，“专业化产业区的起源—以永康五金专业化产业区形成为例的研究”，载浙江大学民营经济研究中心学术文稿第六期，2004 年 5 月，第 24～25 頁。

## 4. 永康五金機械專業化産業区の流通システムの進化

### 4.1 早期の專業市場

改革開放前の時期から、永康では中小の生産と流通を担う動きが広範に出始めており、個別に專業化され特異な商品の形成が進み始めていて、それらが交易される場としての市場の制度的形成を求める必要性が感じられるようになっていた。本稿では、特定商品に限定された市場であって、参入者の規模が数百を超えるほどに多く、かつ、そこでの参入者における生産と流通さらには卸と仲買と小売の分業関係が曖昧な特性をもつ企業を「專業市場」と呼ぶことにする。そうした市場の形成が際立って進んでいるのが現在の浙江省であり、江蘇省であるが、ここではそのような特異な市場制度の形成過程に注目しながら、中国の工業化と産業構造高度化の可能性を探っていきたいと思う。

伝統社会における中国の「小五金」製品は、定期市を通じて消費者への供給が行われてきた。中国では「集市貿易」という概念が用いられている。そのことは、道光《永康县志》と光緒《永康县志》等の史料にも記載されている。光緒十八(1892)年までに、城郷集市としては27個所が、また民国の時期には29個所に発展している。解放初期から1957年までの主な集市としては17個所が確認されている。1958年と1966年の2度にわたって、集市は閉鎖された。これによって在来型の市場制度は一旦消滅した。1978年以降になって、市場の回復が進み17個の集市貿易が回復された<sup>16</sup>。《永康县工商行政管理志》の記載によって、1988年の永康には各種の「集贸市场」(集市貿易市場)43個所があったことが確認できる。そのうち、毎日開かれている市場が7個所、其の他36個所が定期的に交易を行っていた。この43個の市場のうち、7個所は機械・金属加工品の原材料や製品の取引市場となっていて、そのうちの5個所では毎日市場が開設されていた(表7)。

---

<sup>16</sup> 永康县志編纂委員会，《永康县志》，浙江人民出版社，1991年3月，第257～258頁。

表 7. 1988 年永康县五金機械製品の市場交易情况

名称	場所面積(M <sup>2</sup> )	交易日期(农历)	店(个)	集均参加人数(人)	年間商品交易额(万元)	经营方式	形成时间
旧農機市場	3,290	一, 十六		300	23.89	零售	1988
三角販工業品市場	11,334	天天	1,066	2,000	100	批零	1988
芝英工業生産資料市場	10,005	天天	110	150	200	批零	1988
大園東废屑钢铁市場	11,000	天天	198	400	600	批零	1985
孙宅锉刀五金工具市場	3,300	天天	87	300	300	批零	1988
金江龍衡器備品市場	3,330	二, 七	350	2,000	95	批零	1980
桥头周コークス專業市場	4,250	天天	50	450	126	批零	1984

資料出所 :永康县工商行政管理局編纂組,《永康县工商行政管理局志》(内部发行), 1992 年 12 月, 第 67~69 頁。

永康五金機械專業化産業区の発展にとって、大量かつ多品種の原材料が容易に調達できることは基礎的な条件となる。そこでは、鋼鉄、銅、アルミやコークスといったものが必要である。しかし、多くの機械・金属加工業者は企業の規模が小さく、独自で調達すべき原材料の需要は大きなものではない。一方で小ロットの原材料の購買費用は高くつく。また、中小零細事業者の叢生が続くこの地域の機械・金属加工業界での市場競争は激しいので、原材料の価格への反応は誰しも敏感になっていた。こうした理由から、販売組織を通じて原材料の取引コストを下げる必要性が強く求められるようになっていた。原材料を多様に取り引するための「專業市場」の必然性はこうして形成されてきた。ここを通して、全ての機械・金属加工業関連企業の原材料需供を均衡させ、同時に、輸送と取引に関する規模の経済性が追求された。このような背景から、大園東屑鉄市場、橋頭周焦炭市場などの専門市場が次々生まれ、いずれも急激に拡大した。

大園東屑鉄市場は 1984 年頃から形成されてきた。当時、橋頭周村の 100 人余りが全国各地へ出かけ、鋼材を中心とした屑鉄を買い求め、道路の両側に現物を並べて販売するようになった。しかし、取引の活発化にともない、交通に影響が出るようになった。そのため、1985 年 4 月から大園東屑鉄専門市場が設立されることになった。1985 年から 1988 年までに取引された屑鉄は 2.4 万トンに達し、取引金額は 4,800 万元に達していた<sup>17</sup>。「大園東屑鉄市場では、上圓鋼、槽鋼、工字鋼、角鋼、鋼錠、線材、条料、曲げ板など、その品種が多く、規格も様々なものがあり、在庫量は 2,000 トン以上になっていた。そこでは、原材料の倉庫から郷鎮企業や家内工業者に必要な原材料を提供することが出来た。尚且つ、廢

<sup>17</sup> 永康县工商行政管理局編纂組,《永康县工商行政管理局志》(内部发行), 1992 年 12 月, 第 85 頁。

棄物の利用に頼ったことから、多くの鋼鉄の市場価格と比べ30%前後易くなっていた。多くの郷鎮企業や家族経営の企業は大園東屑鉄市場から原材料を購入し、原材料のコストを引き下げ、競争力が向上した<sup>18</sup>と記録されている。

コークスの取引の中心となっている橋頭周焦炭市場は、永東公路の傍の橋に近い周村に設置されている。付近では、五金加工や鑄造業が比較的発達していた。「古山鎮の多くの郷鎮企業や家族経営は八十年代の屑アルミの処理から起業を進め、アルミの成形を行う800余りの郷鎮企業や家族経営に発展し、重量にして年間76,000トンを生産するまでに発展した。全市で古山を中心したアルミ鑄造業界が形成された。まだ、橋頭周りのコークス市場は永康のアルミ成形に必要な燃料を提供した。こうした過程は、八十年代におけるわが市の郷鎮企業や家内工業にとっての、初期的な資本蓄積段階だったと言えよう。芝英鎮、古山鎮等地方工業の生産高は60%以上が五金の金属加工業からなっている。皆我市の專業市場と直接的な関係を持っている。」<sup>19</sup>と現地の報告書は伝えている。

永康五金機械專業化產業区の發展早期において形成された五金製品を専門とする村の間では、大量の中間財の取引が行われるようになった。従って、そうした中間財取引の場合以上に、市場でのコストを引き下げることが市場の發展に繋がるとの政策担当者の意識が形成された。この地域の機械・金属加工品の專業市場の形成には、そうした五金製品の加工專業村の形成が関連していたのである。永康では、最初に形成された製品專業市場である金江龍衡器備品市場の事例について見ておこう。永康の衡器生産は胡庫郷の双門村から始まり、その産地は方岩鎮、胡庫郷、金川郷、芝英鎮等に展開していった。特に、胡庫郷の金江龍、壩塘、双門の三村では最も急激な展開が見られた。「全県は既に前園、双門、芝英の銅や鉄の棹秤、前杭、郭山、橙麓村の吊秤、世雅、黄塘坑の鉄やアルミを使った秤盤、樓店、胡庫村の竿秤などの專業村と2,000軒余りの家内工場があった。製品は金江龍市場で集中して売られ、各市場には500以上の店舗があり、3,300平方メートルの敷地を占有していた。1984年頃になると、毎週の來場人数は平均3,000人余り、最盛期には1万人を越え、在庫を含めた製品の金額は10万余元余り、取引金額は3万元以上になっていた。」<sup>20</sup>「商品は主に県内の4,000社の個體企業の経営者が購入した。1984年以後、市場に來る人々は県内から周辺の他県、そして全国の20の省市に及んだ。一日当りの買い付け業者数は3,000~4,000人で、最盛期には1万人以上となった。店舗は1,000個以上増え、年間の交易額は400万余元余りに達した。」<sup>21</sup>と記述されている。

<sup>18</sup> 高启琢，“我市专业市场在乡镇企业发展中的作用”，载永康市政协文史委员会，《壩塘之路—永康乡镇企业发展的足迹和展望》，1996年1月，第192頁。

<sup>19</sup> 高启琢，“我市专业市场在乡镇企业发展中的作用”，载永康市政协文史委员会，《壩塘之路—永康乡镇企业发展的足迹和展望》，1996年1月，第192頁。

<sup>20</sup> 永康县工商行政管理志編纂組，《永康县工商行政管理志》（内部发行），1992年12月，第82頁。

<sup>21</sup> 永康县志編纂委员会，《永康县志》，浙江人民出版社，1991年3月，第263頁。

## 4.2 専門市場の発展

永康五金機械専門化産業区の急速な拡大は、市域や周辺の郷鎮に数多くの専門市場が形成されることでさらに拍車が掛かった。その結果、より大規模の市場の形成が必要だと考えられるようになった。こうして、五金機械製品の専門市場が構想されるようになり、そのことが永康五金機械専門化区の企業間の連携力を一層深めることになった。こうして、永康では1992年から「中国五金城」の建造が開始され、1993年1月1日に正式な営業が始まった。当時の営業用建物は2万平方メートルで、当初の店舗数は780あった。当年の市場売買額は3億元であった。1995年10月、浙江省工商行政管理局の許可を得て、中国五金城は「浙江永康中国科技五金城」と更名された。その後、十数年の発展を経て、中国科技五金城は全国的に最も大きな五金専門市場となり、国家経済貿易委員会の重点卸市場ならびに浙江省の重点市場としての認定を得ている。現在、中国科技五金城は1万を超える金属素材及び関連製品を全国の各地へ出荷し、80以上の国家と地域へも輸出をしている。市場への来場者は毎日伸べ2万人に達し、一日の取引量は重量にして1,000トン、2002年における市場取引額は126億元に達している。表8のように、金属加工品だけの売買額でも中国科技五金城市場の売買額の84～85%占めている。「全国から購入、地元にて販売」を中心とした機械設備市場と金属材料市場の販売額は中国科技五金城市場の販売額の15～16%を占め、永康五金機械専門化産業区にある中小企業に生産設備と原材料を提供している。

表8. 1993～2002年中国科技五金城の販売額変動

年份	总成交额 (亿元)	分市场成交额 (亿元)		
		五金产品市场	机械设备市场	金属材料市场
1993	3			
1994	13			
1995	21.6			
1996	23.89			
1997	28.62	24.30	1.74	2.58
1998	32.63	27.60	2.10	2.93
1999	56.72	47.82	3.39	5.06
2000	81.45	69.23	4.89	7.33
2001	100.61	85.30	6.26	9.05
2002	126.00	106.50	8.16	11.34

資料出所：中国科技五金城管委会于2003年8月。

中国科技五金城という超大型の機械・金属加工製品市場の建設は永康地域における機械・金属加工品製造の中小企業に対し、外地の関連製品を製造する中小企業との取引と情

報のネットワークを提供した。2000 から 2002 年の間、中国科技五金城では「全国から買い、全国に売る」という拡大方針をもって企 23 業の指導にあたり、域外との売買額は市場総売買額の 29～30%を占めるまでになった。中国科技五金城の発展は域外の機械・金属加工産業の発展に一定の販売システムとルールを齎した。中国科技五金城の主な取引活動は永康五金機械專業化産業区の生産活動と緊密に繋がっている。この部分の販売額は市場の総販売額の 70～71%を占め、そのうち、「全国から買い、地元売る」（原材料の取引が中心）のは市場総販売額の 6～7%を占めている。「地元から買い、全国へ売る」という（中間財や製品を中心とした）取引は、市場総販売額の 42～43%を占めている。「地元から買う、地元売る」という（中間財を中心とした）取引は市場総販売額の 20～22%を占めている（表 9）。このように、中国科技五金城の発展は永康五金機械專業化産業区の原材料、中間財及び金属製品の多大の便益を提供し、流通システム構築の柱となっている。

表 9. 2000～2002 年中国科技五金城機械・金属製品の取引先別動向

貿易方向	2000年		2001年		2002年	
	貿易額 (亿元)	比重 (%)	貿易額 (亿元)	比重 (%)	貿易額 (亿元)	比重 (%)
“全国から買う， 全国へ売る”	24.50	30.08	29.85	29.67	37.20	29.52
“全国から買う， 地元売る”	5.53	6.79	6.82	6.78	8.50	6.75
“地元から買う， 全国へ売る”	34.60	42.48	43.26	43.00	53.10	42.14
“地元から買う， 地元売る”	16.82	20.65	20.68	20.55	27.20	21.59
合計	81.45	100.00	100.61	100.00	126.00	100.00

資料出所：中国科技五金城管委会于2003年8月提供。

\*注：“买全国，卖全国”指非永康本地产品通过中国科技五金城卖到永康以外的地方去，以消费品交易为主；“买全国，卖本地”指非永康本地产品通过中国科技五金城卖到永康来，以原材料交易为主；“买本地，卖全国”指永康本地产品通过中国科技五金城卖到全国去，以消费品交易为主；“买本地，卖本地”指永康本地产品通过中国科技五金城卖到永康，以中间产品交易为主。

中国科技五金城における市場取引の主体は、地元の生産企業が所有する店舗と他地域の生産企業が所有する店舗に分けられる。またそれ以外に流通に特化しているものとして、現地の調査では專業型貿易会社と貿易に関わらない非 24 生産企業とに分類されている。2002 年のデータを例として見ておくと、非生産企業、非貿易会社の経営が 1,300 社と最も多くなっており、市場総経営数の 53.30%を占め、取引額では 65.52 億元を実現し、市場総取引額の 52.00%占めている。このような経営の年間平均売買額は 504.00 万元である。地

元の機械・金属製品生産企業は店舗 731 店を設置し、市場店舗の 29.97%を占め、取引額は 31.50 億元を実現し、市場総取引額の 25.00%を占めている。このような経営の年間平均取引額は 430.92 万元となっている。他地域の機械・金属製品生産企業の店舗は 254 店、市場経営の 10.41%を占め、取引額 13.86 億元を実現し、市場総取引の 11.00%を占め、このような経営による年間平均取引額は 545.67 万元である。專業型貿易会社は 154 社、市場経営社総数の 6.31%を占め、取引額 15.12 億元を実現し、市場総取引額の 12.00%をしめている。この種の経営による年間平均取引額は 981.82 万元となっている（表 10）。

表 10. 1998～2002 年中国科技五金城市場経営累計及び取引額の変動

年 度	総経営数		経営類型区分							
			地元生産企業 の店舗		非地元生産企 業の店舗		專業型 貿易公司		非生産企業、 非貿易公司	
	社数 (社)	取引額 (億元)	社数 (社)	取引額 (億元)	社数 (社)	取引額 (億元)	社数 (社)	取引額 (億元)	社数 (社)	取引額 (億元)
1998	2,380	32.63	710	7.50	236	2.94	105	2.61	1,329	19.85
1999	2,390	56.27	716	12.94	240	5.06	110	4.50	1,324	33.77
2000	2,390	81.45	716	20.36	250	7.35	120	8.15	1,304	45.59
2001	2,410	100.61	723	25.20	250	9.05	137	10.00	1,300	56.36
2002	2,439	126.00	731	31.50	254	13.86	154	15.12	1,300	65.52

資料出所：中国科技五金城管理委員会により2003年8月。

地元の機械・金属製品の生産企業の店舗は平均して規模が最も小さく、專業型貿易会社の平均取引規模が最も大きくなっている。このことは地方の專業市場が地元の中心的企業にとって販売上での様々な便益を得ていることを示している。つまり、企業規模が小さい段階で、その製品は專業市場の流通専門業者を通して全国や海外へ販売されていく。企業が一定の規模になった時、專業市場に店舗を設置し、自社商品を販売することが出来る。企業規模が大きくなり25になった時点で、自立した販売ルートを開拓し、自社商品を販売することが出来るようになる。同時に、これは專業市場内の他社の製品を販売することによって取引の規模拡大を容易にし、同時に取引コストや流通コストの引下げも可能となる。永康における「五金機械專業化産業」を中心した中小企業の原材料、諸中間財と最終製品の需要拡大を基礎にして、中国科技五金城は多くの市場主体を育成し、そのことがまた、機械・金属加工製品の生産企業の專業化と社会的分業関係の高度化に寄与したのである。

永康五金機械專業化産業区は段々大きくなり、中国五金科技城は中国全国だけでなく国際的な機械・金属加工製品の需要を満たすまでになり、国際的な展覧会の要求にまで応じられるようになっていく。全国ならびに国際的な機械・金属製品の展覧会は一方で中国科

技五金城の市場知名度を高めるだけでなく、更に多くの国内外企業をこの市場に呼び込むことになっている。また一方で、永康の企業と内外の関連企業との交流と合作を促進することができ、永康五金機械專業化区の地域競争力と産業競争力を向上させることになっている。1996年から、永康は中国科技五金城に依頼して、定期（毎年の9月26～28日）的に中国五金博覧会を開催している。毎年の中国五金博覧会は全国各省、市、自治区と国外から1,000社近いの五金機械製品生産企業が参加するに至っている（表11）。

表 11. 2000～2002 年中国五金博覧会参加企業情况

年度	出展社 (個)	地元企 業出展 (個)	外地企 業出展 (個)	外地企业展位按省市排名								
				第1位			第2位			第3位		
				省別	展位 (个)	比重 (%)	省份	展位 (个)	比重 (%)	省別	展位 (个)	比重 (%)
2000	620	320	300	浙江	150	50.00	上海	68	22.67	江苏	42	14.00
2001	1,000	520	480	浙江	210	43.75	上海	86	17.92	广东	57	11.88
2002	1,200	660	540	浙江	286	52.96	上海	90	16.67	广东	68	12.59

資料出所：中国科技五金城管理委員会により2003年8月。

中国五金博覧会の開催は、永康五金機械專業化産業区の国際的な地位の向上を狙ったものであり、永康五金機械專業化産業区と国内外の企業との交流や提携関係の促進を目指す一方で、国内外の出展企業と五金機械製品の取引関係にとっても良い機会を与えるものとなった。中国五金博覧会の取引規模は1996年には僅か5.89億元に過ぎなかったが、1997年には8.63億元に、1998年には10.63億元、1999年に16.27億元、2000年に22.30億元、2001年に25.60億元となり、2002年には30.20億元に到達して、機械・金属の取引規模はドイツのケルン、アメリカのシカゴに次いで世界の第三位になっていると地元では評価している<sup>22</sup>。

## 5. おわりに

一般的に言って、多くの途上国では中小企業の形成力が弱い。日本の援助もあって中小企業の育成策に懸命の新興国もあるが、大手企業が一部を分社化して中小企業を増やしたり、国営企業の一部が外見的に独立した企業のように見せかけていたりして、本格的な中小企業の成立とは呼べない場合が多い。また、大企業も自身の生産過程の一部を外部に依存することに躊躇する姿勢が強い。産業構造の高度化に不可欠な社会的分業関係が進捗しにくい状況が多く、多くの場所で見かけられる。

中国でも同様の傾向は見かけられる。ただ、浙江省や江蘇省の一部では明らかに異なっ

<sup>22</sup> このデータは中国科技五金城管理委員会により2003年8月。



た傾向を見て取ることができる。生産工程の一部が独立し、それがやがて独自の産業部門を構成するほどに発達していく事例を見出せるからである。伝統的な鍛冶職人の世界であった浙江省の永康で、たかだかこの10年から20年の間に、急激な金属加工業の発展が見られ、その一部では自動車の組み立てや部品生産までが試みられるようになるとは最近まで想像できなかった。そうした急激な発展力を外部からの技術導入や資金流入だけでは説明できないところに、この地域の面白さがある。

今回の共同研究で得られたものは多い。一見すると伝統的な方式や統制経済的な方式の中に、流通の国際化や広域化を促進する要因が生じていること、また新たな産業や中小企業を叢生させる要素が宿っていることを、我々は個別の事例を通じて明らかにしてきた。中国の産業構造高度化の基本的な方向が見出せたわけではない。しかし、ここでの潜在的な能力と制度的な構造の独自性は、これからの中国のあり方を考える上で、まだまだ多くの社会経済論的意味を秘めているように思われる。

日本側の担当者の時間的個人的な制約から、まだまだ中間的な考察しかできていないことをお詫びするしかないが、すでに浙江大学側から送られてきたデータはこれ以外にも多いし、この地域での調査研究は国際東アジア研究センターの協力も得ながら、さらに継続していく予定である。より立ち入った検討内容については、近い将来に改めて纏め上げて生きたいと思っている。